

巻頭言

歌舞伎座字幕のその後

理事長 新谷 友良

昨年度か歌舞伎座に行きました。歌舞伎座建て替えのときに要望を繰り返し、字幕モニターの利用が始まりました。座席の背もたれに取り付けて利用するのが一般的ですが（2013年5月号巻頭言参照）、残念ながらモニター利用は激減している印象です。借用料が高いのではなく、舞台を見る視線とモニターを見る視線の動きの煩雑さが大きな原因と思えます。モニターは取り外して手に持つこともできますが、舞台の動きにモニターを重ね合わせるわけにはいきません。どうしても大きな視線の移動が必要となり、舞台を楽しめません。やはり、国立劇場小劇場やオペラシティのように舞台袖に字幕スクリーンを置くか、舞台の上にスクリーンを用意し、舞台の動きと字幕が同時に視野に入る工夫が必要と思います。

歌舞伎や文楽、能などはセリフが決まっています、アドリブがほとんどありませんので、字幕を見ながら役者のせりふを追っていくことができます。昔はセリフが聞こえず、所作だけではなかなか楽しむことができなかったのですが、字幕のおかげでずいぶん舞台を楽しむことができるようになりました。しかし、現在の歌舞伎座の仕組みでは、視線の移動の苦勞でその楽しみが半減し、非常に残念な気がしています。

歌舞伎座建て替えのときのもう一つの要望は磁気ループの設置でした。これに対しては、「歌舞伎役者の声は生で聞くもの」という歌舞伎座の考えが強く、結局実現しませんでした。確かに生の役者の声と、マイクを通した声をTコイルで経由して聞くのは随分違います。しかし、その違いは私たちからすれば随分高級なレベルでの違いの話で、音が聞こえるだけで楽しいという私たちの望みが、高級なレベルの壁に跳ね返されるのは大変残念な気がしました。また、その時の話し合いでは、磁気ループアンテナを歌舞伎座施設全体に張りめぐらすのは大変費用がかかるという話がありました。それでは、限定した磁気ループ設置エリアを作れば良いのでは？と言ったところ、チケットの取り合いになるような人気役者が出る公演で、聴覚障害者専用のエリアを設けることは興行的に不可との返事でした。いまは、FM送信機とTコイル利用タイプ受信機といった簡便なシステムも考えられるので、歌舞伎座に再要望すべき時期と思っています。